

「進化論」と「創造説」の対立に関する一考察

—— 20世紀米国に於ける教育内容をめぐる葛藤の一つとして ——

中 野 和 光

(第4部教科)

(平成6年9月12日受理)

1. はじめに

合衆国の宗教教育に関する政策は、反宗派的ではあるが、反宗教ではないと言われる。たとえば、ジェフニー Geffney, M. P. は、次のように述べている。

「合衆国は、その歴史を通して、宗教の側に立っていた——決して中立的ではなかった。この国に於ける教会と州の分離の研究は、全体の意図は、少数派の宗教的見解にたいする不公平を避けることであったことを強く示している。それは、反宗派的ではあっても反宗教ではなかった。」¹⁾

合衆国が宗教の側に立っている例をあげてみよう。

1787年の西北条例の第3条は、次のように述べている。

「宗教、道徳、知識は良い政府と人類の幸福のために必要なものであるから、学校及び教育の諸機関は奨励されねばならない。」²⁾

この西北条例は当時の6つの州の憲法に採用された³⁾。

合衆国が宗教教育の政策において反宗派的であることの根拠は憲法修正第一条の次の規定である。

「議会は国教の成立に関わる、あるいは、宗教の自由を侵す法律：言論の自由、あるいは出版の自由：あるいは、集会の自由、そして、請願の自由を奪う法律を制定することはできない。」⁴⁾

この修正第一条は、一連の判決を通して、公立学校に於ける宗派的宗教教授を除去する根拠となったものである。

政教分離をうたったこの修正第一条の背景には、「各人はその宗教的選択を自分自身でなさなければならない」という啓蒙思想があるといわれている。

たとえば、カントは「啓蒙とは何か」の中で次のように述べている。

「啓蒙とは、人間が自分の未成年状態から抜け

出ることである、(中略) 未成年とは、他人の指導がなければ、自分自身の悟性を使用し得ない状態である。」⁵⁾

「国家において有力な若干の圧制的政治家の宗教的専制主義の後押しをして、意見を異にする国民に圧迫を加えるようなことをするならば、彼は君主の威厳をみずから傷つけることになるのである。」⁶⁾

合衆国の場合、修正第一条に直接影響を与えたのは、マジソン Madison, James とジェファソン Jefferson, Thomas である。

マジソンは次のように述べている。

「宗教は各人の信念と良心に任せねばならない」⁷⁾

「宗教の事柄については、いかなる人の権利も市民社会の機関によって奪われてはならない。」⁸⁾

ジェファソンは、1789年、ヴァージニア議会で「宗教の自由を確立する法案」を通過させている。その法案は、宗教は「理性のみの影響によって広められるべきである」⁹⁾と述べている。

さて、このような啓蒙思想を背景とした修正第一条にもかかわらず、建国後の合衆国の、公立学校においては、プロテスタントの宗教教授が行われた。大きな転機となったのは、1876年、合衆国の上院がこの年以降の新州においては宗派的な宗教教授を行ってはならないという通達を出したことである。この状況において、プロテスタントの指導者達の間には、二つの態度が見られた。一つは、公立学校をプロテスタンティズムの精神で改革しようという社会的福音運動に向かった。今一つは、原理主義の人々である⁹⁾。

前者は、デューイを中心として改革の主導権を握って改革を進めていった。後者は、1920年代に公立学校と強く衝突した後、いったん表舞台から去り、1950年代に社会の主流にはなれないものの復活し、1970年代以降には公の場面に姿を表わすようになり、公立学校のカリキュラムと衝突し始める。本稿はこの原理主義の起源とその発展、公

立学校のカリキュラムとの葛藤の内容と背景、その意味を検討したいと思う。

2. 原理主義の起源とその発展

原理主義は聖書の原典的解釈を強調するプロテスタント福音主義の一派である。

プロテスタント福音主義は、キリスト教の信仰に於ける最高の権威を聖書に求める。この福音主義は、現実の歴史の解釈に於いて二つのグループに分かれた。一つは、合衆国は、神によって選ばれた国である。アメリカのやり方、原則が千年王国の印であり、この千年が終わるとキリストは再び現れ、歴史は終焉するというものである。この考え方を後千年王国と呼ぶ。第2次大覚醒の時のエドワード Edwards, J. によって促進された考えである¹¹⁾。

今一つは、千年王国はいまだ現われず、将来現れる。この世の中は、神の摂理によって支配されており、人間にできることはただ、祈ることだけである、とする前千年王国のグループである¹²⁾。

後千年王国のグループは、人類の歴史は神と悪魔の闘いにより、最後には、正義が勝つと信じ、文化の精神的進歩には楽天的である。アメリカは文化的進歩をリードすることが運命づけられていると信ずる。南北戦争後、自然主義と歴史主義に影響されたよりリベラルな福音主義が現れ、受け入れられていく¹³⁾。前千年王国が受け入れられていくのは1870年代である¹⁴⁾。

マースデン Marsden, George によれば、この前千年王国を信ずる保守的福音主義が1917年から1920年にかけて戦闘的原理主義として現れる¹⁵⁾。

マースデンによれば、1920年から1921年にかけて、原理主義者は二つの前線に闘った。一つは、公立学校に於ける進化論の教授を止めるための闘いである¹⁶⁾。もう一つは、各宗派のなかでのリベラルなグループとの闘いである。

3. テネシー州「モンキー裁判」(1925)

(1) キリスト教と科学

キリスト教福音主義の科学に対する態度は、当初は、必ずしも敵対的なものではなかった。

たとえば、プリンストン神学校の牧師ウォーフィールド Warfield, B. B. は、キリスト教徒の科学と非キリスト教徒の科学を区別し、人類はついに客観的科学的真理の総体を見いだすという思

想を攻撃したオランダ改革派教会のクナイパー Knyper, A. の見解を皮相なものであるとし、科学は人類全体の客観的、統一的な、集積的な営みであり、これらの諸科学の女王が神学であると述べた¹⁷⁾。

キリスト教と科学を調和させるこの世界観の構造をマースデンは次のように説明している¹⁸⁾。

超自然的なもの

二層からなる世界観

自然的なもの

この世界観によれば、宇宙は、自然の法則によって動いている機械である。一方で、神は全ての創造者であるが、創造の実際の働きは、我々は理解できない。この世界観は、自然的なものの超自然的なものを明確に区別することを特徴とする¹⁹⁾。

マースデンはその例として、ウェイランド Wayland, Francis の『道徳科学の基礎』(1835)をあげる。この書物は、聖書による救済と経験科学としての倫理学を分離してとらえていた²⁰⁾。

(2) 葛藤のはじまり

進化論は、このような世界観に挑戦するものであった。

進化論にたいする反対理由は次のようなものであった²¹⁾。

- ①人類の発生に対する説明が聖書とあわない。
- ②人間の尊厳を侵す。
- ③作業仮説としては余りにも多くのばらばらな現象を説明しすぎる。
- ④無神論である。

進化論と反進化論のこの葛藤について、進化論支持者達は、「科学と宗教の闘争」ととらえたのにたいし、多くの保守的な福音主義者達は1900年以前は何が起こっているか気付かなかったとマースデンは述べている²²⁾。

マースデンによれば、その理由として、次の二つをあげている²³⁾。

- ①世俗化への動きは、非宗教界の人々によってなされた。
- ②世俗化はウェイランドの『道徳科学の基礎』にみられるように方法論的に促進された。

マースデンによれば1900年以後に、保守的な福音主義者達が気がついたときには、余りにも遅すぎた。自然的な世界観は、支配的な学問的世界観になっていた。科学のなかに福音的キリスト教は入る余地はなかった²⁴⁾。

保守的な福音主義者にとって進化論は、間違っただものの代名詞であった²⁵⁾。

(3) 反進化論法

反進化論の先頭に立ったのは、長老派教会の信者で、民主党の大統領候補として2度立候補したことのあるブライアン Brian, William J. であった²⁶⁾。

1920年代、南部の諸州は、学校に於ける進化論の教授を停止する措置をとり始めた。ノースカロライナ州議会はダーウインの進化論の教授を非難する決議を採択した。この場合、侵した教師にたいする罰則はなかった²⁷⁾。

ミシシッピ州、アーカンサス州、テネシー州は反進化論法を制定した²⁸⁾。このような反進化論の動きの背景には、原理主義者の反進化論のキャンペーンがあった。「アメリカ聖書十字軍」「反進化論同盟」「ブライアン聖書連盟」「世界キリスト教原理教会」の人々であった²⁹⁾。

(4) モンキー裁判 (1925)

すでに述べたように、テネシー州は反進化論法を制定した州の一つであった。

テネシー州で反進化論のキャンペーンで影響力があったのは、世界キリスト教原理協会のライリー Riley, William B. とブライアンであった³⁰⁾。

1925年1月20日、上院議院シェルトン Shelton, John A. は、「公立学校において進化論の教授を停止する」法案を提出した³¹⁾。

1月21日、下院では、バトラー Butler, John W. 議員が「聖書で教えられている神による創造の物語を拒否し、人間が低級の動物の子孫であると公立学校の教師が教えることを禁止する法案」を提出した。この法律を侵した教師は、100ドル以上500ドル以下の罰金とされた³²⁾。

1月27日、下院はバトラー法案を可決した³³⁾。

上院法務委員会は、1月29日、「宗教的信条に影響するような法案を通過させるのは賢明ではない」という理由でシェルトン法案を否決した。しかし、3月13日、上院にまわされたバトラー法案は24対6、棄権1で可決された³⁴⁾。

ニューヨーク・タイムズはこの法案に対する次のようなコメントを掲載している³⁵⁾。

「アメリカの公立学校の子ども達に、特定の宗教的観念を強制する原理主義者の断固たる努力の徴候である。」(ニューヨーク・ウエストサイド・ユニテリアン教会ポッター Potter, C. F. 博士)

「信仰対無信仰の問題ではなく、知識対無知の

問題である」(コロンビア大学ホークス Hawkes, H. E. 学部長)

この年の7月、テネシー州デイトンの若い生物学の教師、スコープス Scopes, John は、この法律を侵した罪で裁判にかけられた。「アメリカ市民の自由連合」は3人の腕利きの弁護士を派遣した。ブライアンは検察側の応援にかけつけた。弁護側とブライアンの論争はただ、ブライアンの無知をさらけ出すだけだった³⁶⁾。

判決では、スコープスは有罪とされた。しかし、世論と新聞では、圧倒的に進化論支持者が勝った³⁷⁾。

マースデンは、20世紀と都市と大学が、19世紀、田舎、南部に大勝利を収めたのであると述べている³⁸⁾。

テネシー州は農業州で工業化に取り残されていた³⁹⁾。

1925年以降は、原理主義は急速に影響力を失っていった。原理主義は聖書学校、ラジオ放送のようなより目立たない分野に根を下し始めた。ダラス神学校、ボブ・ジョーンズ大学がその運動の中心であった。原理主義者には3つの形態があった。原理主義の教会にあって、近代主義を排除する希望を放棄したもの、原理主義でない教会にあって実質的に原理主義の影響を受けたもの、極端な原理主義者で、自分達の宗派の教会にとじこもるもの、である⁴⁰⁾。

(5) ミズーリ州の場合

ファーマー Farmer, William Wayne のミズーリ州の反進化論法の研究はマースデンやベイリーの場合と少し異なった記述をしている。彼は、テネシー州デイトンのモンキー裁判が原理主義と進化論の衝突として、世間の耳目を集めた決定的な事件であったこと、この問題に対する全国的関心が次第にうすれて、1930年代には、大恐慌、1940年代には、第2次世界大戦に移っていったことを認める。しかし、デイトン事件直後に、「アメリカの大衆は原理主義者である。テネシー州で起こったことは、カンサス州、ミズーリ州、ワシントン州、メイン州でも起こるだろう。テネシー州を世論で袋だたきするのは不公正である」と述べた雑誌記事があったことを指摘し、それを裏づける事実を多数紹介している。

それによれば、1921年から1924年の間に反進化論を提案した州は37州あったが、採択された州は5州である。しかしながら、他の多くの州において、州法以上に、地方教育委員会の政策、市民グ

ループの検閲、世論による圧力が効果的であった。ハイスクールのカリキュラムでは、生物学は教えられなかったり、教えられても、進化論は無視されがちだった。反進化論法を制定しなかった多くの州では、聖書の講読を義務づけた。1926年において11の州が聖書の講読を義務づけ、1つの州は反進化論法を制定した。大学においてすら反進化論キャンペーンは浸透した⁴¹⁾。

ファーマーは、ミズーリ州において、1927年に反進化論法が提案され、議会で否決されるまでの過程を詳細に検討している。

ファーマーの研究によれば、ミズーリ州においては、1927年、反進化論法が制定され、82対62で否決されている。

投票の内訳を見ると、専門職、実業家は賛成23、反対67、農業を営むもの、賛成31、反対13、牧師、賛成3、反対0、であった。

この表決の内訳を見ると牧師である議員は全員賛成であるが、ミズーリ州全体では、全ての教会が賛成したわけではない。12人のセントルイスの牧師は、反対の覚え書きを送り、19人のカンサスシティの牧師は反対の電報を打っている。大多数の教会はこの法案に反対だったのである。

新聞の圧倒的多数もこの法案に反対であった。しかし、賛成でまともな郡の新聞はしばしば沈黙した。

セントルイス市、カンサスシティ市、セントルイス郡は強く反対した。奇妙だったのは、政治的にも宗教的にも保守的な南東部の諸郡が反対したことだった。ファーマーは、そこにスポークス事件の影響を認める。しかし、南東部の諸郡の人々が進化論に対する態度を変えたわけではなかった。進化論に関する論議を教えた教師は疑いなく解雇の可能性に直面した⁴²⁾。

これらのことは、スポークス事件の後、反進化論法を制定したり、提案した州が存在したこと、反進化論法が制定されなくとも、事実上、反進化論の教授は無視されていたこと、を示している。

テネシー州の反進化論法が廃止されたのは1967年のことであった⁴³⁾。

4. 原理主義の復活と学校カリキュラム

第2次世界大戦後、原理主義は復活し始める。1959年には、ミズーリ州で、反進化論法が提案されるが、本会議の前に否決される⁴⁴⁾。

1960年代には、BSCSの教科書を攻撃し、ブルーナーのMACOSを批判した。コールバーク

の道徳的発達段階説、サイモンの価値明確化理論を批判した⁴⁵⁾。しかし、この時代は、原理主義はなお社会の主流にはなりえなかった。

1970年代に入ると原理主義は公の舞台に姿を現わし始めた。学校の授業の中で、「創造説」を教えることを要求した。

(1) シェンプ判決 (1963)

この時代に学校に於ける宗教教授の問題に一つの結論と方向づけを与えたのは、1963年のシェンプ判決であった。

この判決は、学校でのお祈りは違憲とすると同時に客観的、学問的な宗教の学習を積極的に奨励している。

シェンプ判決は次のように述べている。

「人の教育は、比較宗教もしくは、宗教の歴史、その文明の進歩に対する関係の学習無しには、不完全であるといえるかも知れない。聖書はその文献学的、歴史的質に対して学習する価値があるということは確かである。世俗的プログラムの一部として客観的に提示される場合は、聖書もしくは宗教のかかる学習は修正第一条を侵すものではない。」⁴⁶⁾

ウィルソン Wilson, John F. は、憲法が、宗教、連邦体制との関係をいかに規制するかについては、次の二つの解釈の型があると述べている。一つは、分離主義で、宗教と州、連邦国家の分離を主張するもの、今一つは、調停主義で、修正第1条は、直接的な国教の設立、選好的な取り扱いのみを排除したものであって、州は、個人または、集団でなされる宗教的な実践を可能にするようにすべきである、とするものである⁴⁷⁾。

シェンプ判決は明らかにこの調停主義の立場に立っている。

(2) 公立学校に於ける宗教学習

シェンプ判決が、宗教を学問的に学習することを奨励したことを受けて、宗教学習に関する団体ができた。1960年代初めにできた宗教教授協会 (Religious Instruction Association)、宗教と公教育に関する全国評議会 (National Council on Religion and Public Education)、公教育宗教学習センター (Public Education Religion Studies Center) である⁴⁸⁾。

これらの団体は、宗教学習のカリキュラム、教授法、教科書等の教材、教師教育のプログラムなどを検討した⁴⁹⁾。

シェンプ判決に於ける「客観的」とは、「中立

的、開放的、自由、学問的」に学習することであると理解された⁵⁰⁾。

コースは、宗教文学、文学としてのあるいは文学の中の宗教、世界の宗教、アメリカの宗教問題、等であった⁵¹⁾。

宗教学習の目標は、ピディスカルジ Piediscalzi, N. によれば、「宗教の性質と機能についての広いバランスのとれた理解」であった⁵²⁾。

少数の人々の熱心な努力にもかかわらず、公立学校の関係者は、宗教学習に消極的であった。その理由として、ピディスカルジは次のことをあげている。

ほとんどの公立学校関係者がシェンプ判決を理解せず、裁判所がなお宗教学習を禁じていると考えていること。無用の混乱がおきることをおそれているものもいること。現在の仕事で手いっぱいであること。宗教学習に教育的意義を認めていないこと⁵³⁾。

(3) 「創造説」の学習

宗教についての学習が奨励される事態において、原理主義者は公立学校において創造説を科学として教えることを要求した。

1973年、テネシー州は、「テネシー創造説法」を制定した。それは、公立学校の生物学の教科書は、人類の起源に関する理論は、事実としてではなく、理論として記述されなければならないこと、進化論と創造説を同じ量記述することを要求するものであった。この法律は、1975年に違憲とされた⁵⁴⁾。

ミネソタ州も同様の法案が提案されたが、上院文教委員会では否決された⁵⁵⁾。

1981年、アーカンサス州では、「公立学校に於ける創造科学と進化科学の均衡のある取り扱いを要求する法律」が議会を通過した⁵⁶⁾。同様の法律は、ルイジアナ州、ミシシッピ州でも採択された⁵⁷⁾。これらの一連の立法の背景には原理主義者のロビー活動があった⁵⁸⁾。

1982年、合衆国連邦地方裁判所は、アーカンサス州の法律を違憲として無効とした⁵⁹⁾。1987年、連邦最高裁判所はルイジアナ州の「創造科学と進化科学の均衡ある取り扱い法」を、創造説を教えること自体は違憲ではないが、その立法の手続きが違憲であるという判決を下した。この判決は、進化論対創造説の対立を州のレベルから地方教育委員会のレベルに降ろしてしまった。それは原理主義者の望むところであった⁶⁰⁾。原理主義者の中には、ブリス Bliss, R. B. のように、創造説と進

化論を宗教対科学としてではなく、二つの理論モデルとして教えるべきであるとするものもいた。(2モデルアプローチ)⁶¹⁾

生物学の教師の中には、「教師は論議の対象になっている問題の全ての側面を正確に提示する責任がある」「対照によって教えるのは、効果的な概念の提示方法である」といって、2モデルアプローチを支持するものもいた⁶²⁾。

しかし、「いかなる科学者も真理に対して、原理主義者たりえない。科学者は、原理的な、絶対的な確実性を信じない。」⁶³⁾ (モンタグ Montagu, Ashley) というのが、創造科学に対する科学者の一般的態度であったろう。

ジーマーマン Zimmerman, Micael の調査によれば、オハイオ州の教育委員長の態度はつぎのようなものであった⁶⁴⁾。

	は	い	いいえ	わから ない
1. 創造科学は好意的に教えられるべきか	52.7	40.8	6.6	
2. 進化論は好意的に教えられるべきか	67.3	27.4	5.4	
3. 創造科学は現在好意的に教えられているか	13.7	71.4	14.9	
6. 創造科学を教えることは宗教を教室に持ち込むことを意味するか	41.7	52.1	6.2	
7. 進化論を教えることは宗教を教室に持ち込むことを意味するか	8.9	85.7	5.4	
8. 進化論を教えないようにという圧力がありましたか	1.2	94.4	4.5	
8a. このような圧力は適切ですか	9.8	81.6	8.6	
9. 進化論を教えるようにという圧力がありましたか	1.2	94.0	4.8	
9a. このような圧力は適切ですか	11.9	77.1	11.0	
10. 創造科学を教えないようにという圧力がありましたか	1.5	93.4	5.1	
10a. このような圧力は適切ですか	17.9	71.7	10.4	

は適切ですか

11. 創造科学を教えるようにという圧力がありましたか	1.8	91.7	6.6
11a. このような圧力は適切ですか	8.0	80.6	11.3
13. 進化論を受け入れますか	49.7	36.3	14.0
14. ほとんどの科学者は進化論を受け入れていますか	67.0	19.0	14.0
15. 学校で宗教教育を行うことに反対ですか	45.2	47.9	6.8

(数字は%)

(4) 原理主義の学校

原理主義の支配する学校はいかなるものであろうか。

ベシュキン Peshkin, Alan は、イリノイ州ハートニー市にあるベサニー・バプティスト・アカデミーという原理主義者の学校に一年半滞在し、観察参加した経験を基に、原理主義の学校を「全体的機関」(total institution)として描いている。

「全体的機関」とは、「大勢の同じ状況の人々が、相当な期間、広い社会から隔絶されて、形式的に管理され、囲いこまれた生活を送っている場所⁶⁵⁾」である。

ベシュキンによれば、ベサニー・バプティスト・アカデミーは、かれらのいう、神の栄光に奉仕するという目的を達成するための組織的な手段である⁶⁶⁾、と述べている。

この学校の教育目的はつぎのようなものである⁶⁷⁾。

- ①子ども達を救済すること
- ②子ども達に神の言葉を教えること
- ③子ども達を神の言葉に浸らせること
- ④子ども達を世界から遠ざけること
- ⑤子ども達を救われざるものを改宗させるよう激励すること
- ⑥子ども達を説教師、教師、福音主義者、等のキリスト教徒の全日の奉仕者になるよう導くこと
- ⑦このような奉仕者にならなくとも、常に神の栄光をたたえるように人生を生きるように導くこと

具体的なカリキュラムは次のようなものである⁶⁸⁾。

第7学年

1. 国語, 2. 理科, 3. 礼拝/音楽隊/スタディ・ホール, 4. 数学, 5. 昼食, 6. 聖書, 7. 地理, 8. 聖歌隊

第8学年

1. 合衆国史, 2. 国語, 3. 礼拝, 4. 聖書, 5. 昼食, 6. 数学, 7. 理科, 8. 聖歌隊

第9学年

1. 国語, 2. 世界史, 3. 礼拝/ジャーナリズム/魂の獲得/スタディ・ホール, 4. 聖書, 5. 昼食, 6. 物理科学, 7. 代数Ⅰ, 8. 音楽隊/聖歌隊

第10学年

1. 国語, 2. 代数Ⅱ/関数, 3. 礼拝/ジャーナリズム/魂の獲得/スタディ・ホール, 4. 生物学, 5. 昼食, 6. スピーチ, 7. 聖書/運転教育(前期)/聖書(後期), 8. 音楽隊/聖歌隊/産業技術/スタディ・ホール

第11学年

1. 製図/物理/タイピングⅠ/スタディ・ホール, 2. 聖書/健康, 3. 礼拝/ジャーナリズム/魂の獲得/スタディ・ホール, 4. 合衆国史, 5. 昼食, 6. 国語, 7. 演劇/オフィスの実践/スペイン語/スタディ・ホール, 8. 音楽隊/聖歌隊/産業技術/スタディ・ホール

第12学年

1. 製図/物理/スタディ・ホール/タイピングⅠ, 2. 聖書/健康, 3. 礼拝/ジャーナリズム/魂の獲得/スタディ・ホール, 4. 国語, 5. 昼食, 6. 公民(Government)/経済, 7. 演劇/オフィスの実践/スペイン語Ⅱ/スタディ・ホール, 8. 音楽隊/聖歌隊/産業技術/スタディ・ホール

5. おわりに

ブライアンがスポークス事件において繰り返し述べたことは、進化論は仮説であって事実ではない⁶⁹⁾、ということである。彼らにとって重要である世界観を超自然的であるという理由で、排除してまで、仮説を事実として教えることに原理主義者は抗議し、問題としているのである⁷⁰⁾。

原理主義者は、創造説法の立法に見られるように公の場に現れるようになったとはいえ、キリスト教保守派の一部ではない。もし、聖書の言葉を文字どおり信ずる人をキリスト教徒というなら、全てのキリスト教徒は原理主義的要素をもっている。この意味では、キリスト教徒であって、原理

主義者か原理主義者でないかは、千年王国に関する解釈を度外視すれば、近代主義、自然主義、歴史主義を受け入れる程度の問題でしかない。

ベシュキンが、原理主義の学校は社会から隔絶された機関であるというのは今日の状況に於いて、原理主義の学校がそのような性格を帯びるのであって、原理主義の立場の学校が社会から常に隔絶されるというわけではない。カルヴィン主義の支配するニューイングランド植民地の学校は、ある意味で、原理主義の支配する学校であったが、社会から隔絶されていたわけではない。19世紀に於いては、原理主義者は道徳的には多数派であった。

ただし、原理主義の学校が閉じられた世界観で生徒を教育していることは間違いない。公立学校

が様々な考え方を教えるのに対し、原理主義の学校は一つの考え方、一つの見方しか教えない。

シェンプ判決で、「中立的、開放的、自由、学問的」と理解されるところの「客観的」な宗教学習を奨励したのは、合衆国の公立学校のカリキュラムが「宗教に関することがらは、自分自身で決定する」という啓蒙思想にいかに基づけられているかを示している。調停主義の立場の判決に於いても、修正第一条の理念は貫徹されているのである。

ラシュドゥーニー Rushdoony, R. J. が「カルヴィン主義と啓蒙思想の間には、妥協はあり得ない」⁷¹⁾と述べたのは、原理主義者の真の敵は、進化論ではなく、啓蒙思想であることを良く見抜いている。

注並びに引用文献

- 1) Geffney, M. P., Religion in Elementary and Secondary Education, in Johnson, F. E., ed., American Education and Religion, Kennikat Press, 1952, p. 174.
- 2) The Northwest Ordinance and Education (1787), in Cohen Sol, ed., Education in the United States, Random House, 1974, p. 809.
- 3) Monroe, Paul, Founding of the American Public School System, Haefner, 1971 (c1946).
- 4) Morris, A. A., The Constitution and American Education, West Pub. 1980, p. 11.
- 5) カント・I, 著・篠田英雄訳『啓蒙とは何か』岩波文庫 1950, 7 ページ
- 6) 同上書 16ページ
- 7) Madison, James, A Memorial and Remonstrance against Religious Assessment, in Kliebard H. M. ed., Religion and Education in America, International Textbook Co. 1969, p. 50.
- 8) Ibid.
- 9) A Bill for Establishing Religious Freedom, in Lee Gordon ed., Crusade against Ignorance, Teachers College, 1961, p. 66-68.
- 10) Mead, Sydney, Y., American Protestantism since the Civil War I, From Denominationalism to Americanism, The Journal of Religion, vol. 36, 1956, no. 1, p. 1-16 にもどづく
- 11) 以上 Marsden, George, Fundamentalism and American Culture, Oxford University Press, 1980, p. 49.
- 12) Ibid., p. 51.
- 13) Ibid., p. 49-50.
- 14) Ibid., p. 51.
- 15) Ibid., p. 141.
- 16) Ibid., p. 164.
- 17) Marsden, George, Evangelicals and the Scientific Culture : an Overview, in Lacey, Michael ed., Religion & Twentieth Century American Intellectual Life, Woodrow Wilson International Center for Scholars and Cambridge University Press, 1989, p. 23-24.
- 18) Ibid., p. 29-30.
- 19) Ibid., p. 30.
- 20) Ibid., p. 31.
- 21) Ibid., p. 33-37.
- 22) Ibid., p. 41.

- 23) Ibid., p. 39.
- 24) Ibid., p. 41-42.
- 25) Ibid., p. 44.
- 26) Numbers, Ronald L., The Creationists, in Lindberg David C. and Ronald L. Numbers ed., God and Nature, University of California Press, 1986, p. 394.
- 27) Bailey, Kenneth K. The Enactment of Tennessee's Anti-evolution Law, Journal of Southern History, vol. 16, July, 1930, p. 472-473.
- 28) Ibid., p. 473.
- 29) Ibid.
- 30) Ibid., p. 474.
- 31) Ibid., p. 475.
- 32) Ibid., p. 476.
- 33) Ibid.
- 34) Ibid., p. 482.
- 35) Ibid., p. 485.
- 36) Marsden, George, Fundamentalism and American Culture, op. cited, p. 185-187.
- 37) Ibid., p. 185-186.
- 38) Ibid., p. 186.
- 39) Bailey, op. cited, p. 489.
- 40) Marsden, op. cited, p. 193-195.
- 41) Farmer, W. Wayne, The Anti-evolution Crusade in Missouri, 1922-1971, diss., University of Missouri, 1974, p. 3-9.
- 42) 同上論文の要約
- 43) The Tennessee Anti-evolution Act (1925), in Zetterberg, J. Peter ed., Evolution versus Creationism, Oryx Press, 1983, p. 386.
- 44) Farmer, op. cited, p. 232-238.
- 45) Provenzo, Eugene I., Religious Fundamentalism and American Education, State University of New York Press, 1990, p. 31-50.
- 46) Abington v. Schempp (1963), in Kliebard, H. M. op. cited, p. 222.
- 47) Wilson, John F., Religion, Government, and Power in the New American Nation, in Noll, Mark A. ed., Religion and American Politics, Oxford University Press, 1990, p. 77-91.
- 48) Will, Paul J. ed., Public Education Religion Studies : An Overview, American Academy of Religion, 1981, p. 14-18.
- 49) Ibid.
- 50) Ibid., p. 31.
- 51) Ibid., p. 8.
- 52) Ibid., p. 34.
- 53) Ibid., p. 18-19.
- 54) The Tennessee Creationism Act (1973), in Zetterberg, J. Peter op. cited, p. 387.
- 55) The Minnesota Creationism Bill (1978), in Zetterberg, op. cited, p. 392-393.
- 56) The Arkansas Creationism Act (1981), in Zetterberg, op. cited, p. 397-401.
- 57) The Louisiana Creationism Act (1981), in Zetterberg, op. cited, p. 394-396. Montagu, Ashley ed., Science and Creationism, Oxford University Press, 1984, p. 4.
- 58) Montagu, Ashley, Introduction, in Montagu, Ashley ed., Science and Creationism, op. cited.
- 59) The Arkansas Decision, in Zetterberg, op. cited, p. 402-429.
- 60) Zimmerman, Michael, The Evolution-Creation Controversy : Opinions of Ohio School Board Presidents, Science Education, vol. 75, no. 2, 1991, p. 201-202.
- 61) Bliss, Richard B., A Two-Modell Approach to Origins : A Curriculum Imperative, in Zetterberg, op. cited,

- p. 192-198.
- 62) Bergman, Jerry, Teaching about Creation/Evolution Controversy, Phi Delta Kappan Educational Foundation, 1979.
- 63) Montagu, Ashley, Introduction, in Montagu, Ashley op.cited, p. 7.
- 64) Zimmerman, Michael, op. cited, p. 203.
- 65) Peshkin, Alan, God's Choice, The University of Chicago Press, 1986, p. 261.
- 66) Ibid., p. 275.
- 67) Ibid., p. 259.
- 68) Ibid., p. 301-302.
- 69) Marsden, George, Fundamentalism and American Culture, op. cited, p. 213.
- 70) Ibid., p. 214.
- 71) Provenzo, Eugene, F., op. cited, p. 5.